

書籍紹介

久佐賀義光著『日本語と中国語の落とし穴——用例で身につく「日中同字異義語100」』（日本僑報社、2015年）

外国語といっても中国語は漢字を使うから分かり易い、話せなくても“筆談”で通じると気楽に考えている日本人は今でも少なくないだろう。確かに上記の短い文だけでも、外国語・中国語・漢字・筆談・日本人の5語は日中両言語でほぼ同様に用いられる。とはいえ、それは物事の一面であり、全く同じ字面^{じづら}でありながら、日本語と中国語では意味の違う場合も少なくない。筆者は長年中国語を学びながら、恥ずかしいことではあるが、中国語の文章を読んでいて日本語と同じ形の語句にぶつかると、つい日本語の意味に引きずられてしまいそうになることがある。日本語と中国語が漢字を共有していることが、かえって誤解を生みだす「落とし穴」になっているのである。

例えば中国語の「汽車」「手紙」が日本語では「自動車」「トイレットペーパー」であることはよく知られており、日中間の同字異義語を論じた著作も少なくない。本書の著者は、東京外国語大学中国語科の出身、三井物産の初代駐中国総代表を務めた対中ビジネスのベテランで、中国日本商会（著者はその前身である北京日本商工クラブ2代目会長）のメールマガジンに、2005年2月から「中国語で誤解しないように」というコラムを連載し、1回ごとに「油断一秒・怪我一生」「大意」「汽車」「火」「請求」等の、日本語と中国語での意味の相違を「ビジネスに関連付けて」解説した。本書は、そのうちの100語をまとめたものである。

例えば「合同」。日本語では、複数のものを1つにすること（他に、同一の図形の意味もあるが）で、「AとBが合同で会議をする」は中国語で「A和B联合开会」となる。逆に中国語の「合同」は

契約の意味で、「签订合同」は「契約を結ぶ」ことである。「合同」は両言語での違いははっきりしている。しかし「手腕」となると日中とも「腕前・才能」のことだ。しかし日本語では、「手腕がある」（中国語訳「有才干」）「手腕を振るう」（同「发挥本领」）等、よいイメージだが、中国語では「手管や術策を弄する暗いイメージ」があり、「耍手腕儿」は、「駆け引きをする・手管を弄する」の意味になる。つまり「手腕」は、日本語と中国語で「同じ意味で使われているとしても、そのニュアンスが全く異なって」いる。同じく同字異義語といっても一律ではないのだ。本書は、それぞれの同字異義語について、多くの例文を用いて丁寧に説明している。（大東文化大学研究員 伊藤一彦）

中国人気ブロガー招へいプロジェクトチーム編、周藤由紀子訳『ナゾの国 おどろきの国 でも気になる国 日本——中国人ブロガー22人の「ありのまま」体験記』（日本僑報社、2017年）

本書は、2016年3月に中国で中央編訳出版社から刊行された『大家看日本』の邦訳版である。内容は中国のジャーナリストブロガーの日本訪問記であり、「日本は中国の鏡だ。相手の中に自分が見え、あるいは相手を見て自分をさらに知る」（p. 264）という日本認識が特徴だ。

2011年～2015年にかけて笹川平和財団は「中国人気ブロガー招へい」事業で14回にわたって日本に35人のブロガーを招いた。そのうち執筆に応じてくれた22人の手記をまとめたものが本書である。執筆者の年齢は20代から60代まで幅広い。その多くが、かつて1990～2000年代に新華社や中央電視台あるいは南方都市報系列の都市報メディア等で勤務したジャーナリストであり、いまはネットメディアで影響力をもつインフルエンサーである。

三部構成の本書は「第一部／「五〇後、六〇後」の日本観」「第二部／他山の石とする」「第三部／

百聞は一見にしかず」と手記の特徴ごとにまとめている。「中国人ブロガー」という切り口とポップな表紙から、一見ソフトな話題を扱っているように思われかもしれない。

しかし日中民間交流の現場や、日本赤十字社の高潔な仕事を支える仕組み、食の安全や和食の美意識、地方・農村振興、コミュニティのあり方など日中両国で共通する課題を念頭においた硬派な内容が並ぶ。NHKのプロフェッショナルな報道を称賛し、公共放送として「非政府、非営利」を貫く姿勢と比較すると、中国中央電視台は「政府、営利」に過ぎないと述べる包麗敏GQ編集長の指摘も鋭い。

日本訪問を機に中国人の日本認識がどう変化するのか読み解ける文章もある。「父の日本と私の日本」を執筆した楊錦麟は香港テレビ業界の著名人だが、日中戦争で父や祖父が戦火を逃れて南方に移住していった経緯から、彼も60歳近くになるまで日本を敬遠していたという。しかし日本訪問を経て、「日本に対してもつべきでない政治的偏見はなくなったし、そのような偏見はもう二度と持たないだろう」(p.48)と楊は述べる。

東日本大震災直後、中央電視台の特番で2週間震災報道をし続けた章弘の「二度と帰らぬ日々」には中国でどう震災報道がされたのか知る事ができる。4年半後の被災地や原発所在地の様子も章は取材しており、現地の現況を知りたい日本の読者にとっても一読に値する内容となっている。

(公益財団法人笹川平和財団 小林義之)

馬場毅編『近代日中関係史の中のアジア主義——東亜同文会・東亜同文書院を中心に』(あるむ, 2017年)

戦前日本のアジア主義団体として知られた東亜同文会と、その下に上海に設立された東亜同文書院大学。戦後その組織は解散したものの、同文書

院大学の後身とも言える愛知大学が設立され、また同文書院大学の卒業生は戦後も各界で活躍したことは様々な文脈で語られ、関連研究も数多ある。本書はそうした東亜同文書院研究に新たなページを加えんとしたもので、「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」を主テーマとした共同研究の成果の一つである。

後述するように本書は「序説」に続き全6章からなるが、とりわけ筆者が興味深く読んだのは、戦後東亜同文書院大学復活に向けた動きがあったことを明らかにした第6章「東亜同文書院の「復活」問題と霞山会」(堀田幸裕)である。それによれば、戦後も同窓会組織である滬友会を中心に、後継校設立の願望が根強く残っており、これは1960年代に中国語講習会という形で実現し、さらに東亜学院開校へと繋がった。しかし学生運動の激しかった当時、東亜同文書院の復活に対する社会の風当たりは厳しかった。また同窓生から書院の復活を期待されていた霞山会と滬友会の当事者たちも一枚岩ではなく、通産省まで巻き込みつつ肥大化した大学再建構想も、結局実現に至らなかったのである。

同じく戦後に着目したものとしては、第5章「東亜同文書院中の台湾籍学生と林如堦、吳逸民兩人の戦後の白色テロ体験」(許雪姬〔朝田紀子訳〕)の視角も興味深い。本章の眼目は、総計26名の台湾人学生のその後の進路である。著者には満洲建国大学の台湾人卒業生の行方を追った成果があるが、本章は同様の問題関心を上海に照射したものだ。卒業生の中には、汪精衛政権に参加した者や、戦後国民党の統治下で処刑された者もあったが、大半は日本との関係を生かして、対日貿易に関連する仕事に就いた。本稿ははまだ完備していないというが、戦後日本の華僑動向とも関わると思われる、一層の研究の深化に期待したい。

(日本学術振興会特別研究員 関智英)